

2026

新
春
てい
鼎
談

持続可能な社会づくりへの挑戦

歩み続けた55年



「キリンビール株式会社
代表取締役社長

ほりぐち ひでき
堀口 英樹

「市長

なかむらおさむ
中村 修

「キリンビール株式会社
取手工場長

おかひさ まさとし
岡久 正俊

※鼎談は、3人が向かい合って話すことを意味します。

取手市は令和7年10月1日に市制施行55周年を迎えました。市内には数多くの企業がある中、キリンビール取手工場は取手市の市制施行と同じく昭和45年に操業を開始し、まちの誇りとして歩み続け、市と共に発展してきました。

今回の新春鼎談は、キリンビール株式会社(以下、「キリンビール」という)から堀口代表取締役社長、岡久取手工場長をお迎えし、持続可能な社会づくりに向けた理念を語り合い、企業と行政の連携などから地域の未来を展望します。

歩み続けた55年



中村市長

中村市長(以下「中村」) 取手市とキリンビールの55年を振り返って、取手工場の操業開始当時の状況などをお聞かせください。

堀口社長(以下「堀口」) 取手工場は、当社の10番目の工場として昭和45年に操業を開始しました。当時は高度経済成長期の絶頂期で、ビール市場も右肩上がり

で消費が増えていました。

岡久工場長(以下「岡久」) 取手の地に工場を建設したのは、人口急増に合わせて首都圏市場の需要増加に応えること、当時の国鉄取手駅に近く、専用線の敷設が容易であること、当時増加していたトラック輸送に対応できる国道6号に面していること、そしておいしいビール造りに欠かせない水を小貝川から取水し、良質な水を大量に確保できることが主な理由でした。



鼎談の様子を動画で公開

市ホームページで鼎談の様子を動画で公開しています。紙面上では掲載できなかった内容もご覧になれます。



中村 取手市民としても、キリンビール取手工場が建設されたことは、大変よろこばしいことでした。当時の取手市は、高度経済成長期の影響によって、井野団地や戸頭団地が建設されるなど、首都圏のベッドタウンとして人口が急激に増加し、茨城県の玄関口として躍進しました。

堀口 昭和40年～50年代にかけてもビール需要は伸び続け、取手工場は首都圏の需要を支える主力工場としてフル回転の工場となりました。

そして、平成2年に発売された「キリン一番搾り」は今でも主力商品として取手工場でも製造し続けています。

岡久 現在の取手工場は、キリンビールにおける最大の製造物流拠点です。

取手工場で製造量が多いのは、「キリン一番搾り」「淡麗プラチナダブル」「キリン氷結」シリーズで、茨城県をはじめ東京都、千葉県、埼玉県、栃木県、群馬県に出荷しています。また、多様なRTD(チューハイ)商品・ノンアルコールビール・クラフトビールなど、数多くの商品を製造する旗艦工場となりました。



堀口社長

◆堀口 英樹 代表取締役社長

昭和37年生まれ。慶應義塾大学商学部を卒業し、キリンビール株式会社に入社。キリンホールディングス株式会社 経営企画部グループブランド室長、フォアローゼズディスティラリー社 代表取締役社長、小岩井乳業株式会社 代表取締役社長、キリンビバレッジ株式会社 代表取締役社長などを経て、キリンビール株式会社 代表取締役社長に就任。

◆岡久 正俊 取手工場長

昭和43年生まれ。千葉大学大学院工学研究科修士課程を修了し、キリンビール株式会社に入社。キリンビール株式会社 横浜工場パッケージング担当部長、キリンビバレッジ株式会社 生産本部生産部生産管理担当、キリンビール株式会社 生産本部生産部、キリンホールディングス株式会社 R&D本部パッケージイノベーション研究所長などを経て、キリンビール株式会社 取手工場長に就任。